



Title	『聖セウエリヌス伝』にみる聖人像
Author(s)	指, 珠恵
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 1989, 23, p. 57-81
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/48057">https://hdl.handle.net/11094/48057</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 『聖セウエリヌス伝』にみる聖人像

指 珠 恵

## はじめに

『聖セウエリヌス伝』<sup>(1)</sup>は、五一一年、ナポリ近郊のルクランム修道院の院長であったエウギッピウスによって書かれたもので、五世紀後半の属州ノリクムに関するほとんど唯一のまとまった証言となっている。ノリクムは、ほぼ今日のオーストリアに相当するドナウ河岸の国境の属州で、当時しばしば異民族の侵入にさらされていたところであった。著者エウギッピウスはセウエリヌスの晩年の弟子で、セウエリヌスとともにノリクムの修道院に生活し、四八二年のセウエリヌスの死後、他の弟子たちとともにイタリアに移住してルクランムに修道院を建てた。<sup>(2)</sup>そこで後に修道院長となった彼が、自らの体験と年長者たちの話をもとにノリクムにおけるセウエリヌスの生涯と活動を書き記したのが、この『聖セウエリヌス伝』である。<sup>(3)</sup>

まず、伝記の内容を簡単に紹介しておこう。伝記の舞台は、主にドナウ河に添った河岸ノリクムの諸都市である。セウエリヌスは「アッチラの死後」<sup>(4)</sup>東方パンノニア州からノリクムに入り、まず伝記中でドナウ河の「下流側の諸

都市」と呼ばれているアストゥリス、コマゲニス、ファウイアニスといった諸都市において、禁欲生活者としての高潔さとゲルマン人の襲撃を予言するなどの奇跡を起こしたことによって民衆の信望を得、指導的な地位につくようになる。彼はファウイアニスに修道院を建設し、そこに滞在していた。しかし、彼の名声が高まるにつれて、とりわけゲルマン人の襲撃の激しかったドナウ河「上流側の諸都市」、すなわちラウリアクム、ヨウイアコー、ポイオトロ、さらにラエティアに入ってバタウイス、クインタニス、ドナウ河の支流ザルツアッハ河沿いのユーウアオー（現ザルツブルク）、ククリスといった諸都市に招かれるようになり、そこでゲルマン人の侵入に際して都市の防衛を指導したり、ゲルマン人の王たちと交渉して捕虜の解放に努めた。彼は、ここでもいくつかの修道院を建設して人々の信仰を導く一方、貧者への施しを奨励して住民の生活の安定をはかったり、病氣治癒などの奇跡を行なった。しかしまもなく「上流側の諸都市」はゲルマン人の攻撃によって破滅し、セウエリヌスは住民を率いて「下流側の諸都市」へと移住させる。しかしそこもゲルマン人の一派ルギー族の支配下に入り、貢納の義務を負うようになっていた。<sup>(5)</sup>セウエリヌスはルギー族の王との交渉により、貢納と引き替えに移住してきた人々の安全を約束させるが、その一方で、まもなくノリクムの住民がイタリアに移住し、蛮族の支配から解放されることになるだろう、と予言する。セウエリヌス自身はイタリア移住の実現を見ることなく四八二年にファウイアニスの修道院で亡くなるが、彼の死後、ルギー族はオドアケルの軍と戦って敗れ、その後オドアケルの命令で全属州民がイタリアに移住したと伝記は伝えている。移住に際してセウエリヌスの弟子たちは、師の遺言に従って彼の遺体を携えてゆき、最終的にルクルナムに埋葬して、その地に修道院を建てた。彼の壮麗な葬儀の様子を伝えて伝記は終わっている。

さて、この『聖セウエリヌス伝』は、歴史的背景の描写の占める比重が大きく、聖人伝としては異彩を放っているため、史料としても注目され、戦後特に研究が盛んになった。他方で、この伝記は中世の聖人伝の模範としてスルピキウス・セウエルス(6)の『聖マルティヌス伝』と並び称されているものでもある。両者はともに、ポツンディウスの『聖アウグスティヌス伝』やパウリヌスの『聖アンブロシウス伝』のような古代の皇帝伝の流れをくむ修辭的で称賛演説的な型の聖人伝と並ぶ、古代の聖人伝のもうひとつの型、即ち、聖人が起こした奇跡を通じて現われる神の力の称賛に主眼を置き、多くの奇跡物語を列挙する形で展開する聖人伝の典型とされている。(7)しかし、そこに描かれたセウエリヌスの奇跡は、『聖マルティヌス伝』にはない政治性を持っている。この点で『聖セウエリヌス伝』は、ゲルマン侵入という時代の聖人伝であり、そこには時代に対応した新たな聖人像を見ることができのではないだろうか。このような観点からこの伝記に描かれた聖人像を検討することが本稿の目的である。

#### 一 『聖セウエリヌス伝』の時代のノリクム

本節では、『聖セウエリヌス伝』の史料性格と信憑性に関する議論を中心に、近年の研究動向を紹介し、セウエリヌスの活動の前提となる当時のノリクムの状況を考えたい。

先にも述べたように、エウギッピウスは伝記の中で、上流側の諸都市の破滅と下流への移住、さらにそこからイタリアへの移住がなされたと述べている。この印象的で生々しい証言のゆえに、『聖セウエリヌス伝』についての初期の研究の多くは、これをゲルマン人の侵入にさらされた国境の属州の惨状とその崩壊の様子を伝える史料として扱い、特に、「全属州民がイタリアへ移住した」という記述がこの属州の最後を示すものとして注目された。(8)た

たとえば、戦後の『聖セウエリヌス伝』研究の出発点をなしているF・カップハーンは、セウエリヌスがやってきたときのノリクムを「船長も舵手もない船のように世界史の海上に漂い、次の暴風に岩礁に乗り上げて粉碎されるか、不名誉な没落をする他ないように見えた。」と表現している。そして、セウエリヌスの指導によって破滅は免れたものの、それはイタリアへの移住によって初めて可能になったのであり、属州での生活の継続は断念せざるを得なかった、とする<sup>(9)</sup>。また、カップハーンについて包括的な研究を行なったR・ノルも、当時の属州の生活はきわめて危険で困難であったとしており、セウエリヌスを「神の命を受けた苦難からの救済者」として性格づけている<sup>(10)</sup>。

しかし、このようにノリクムの危機的状況を強調する傾向に対しては、批判も出されていた。すでに戦前から、A・ドブシュらは、作者エウギッピウスが、アリウス派や異教のゲルマン人を敵視するカトリック的視野のゆえに、記述を実際以上に暗くしている可能性を指摘していた<sup>(11)</sup>。さらに一九六〇年代に入って、H・J・ディーズナーやF・ロッターを中心<sup>(12)</sup>に、『聖セウエリヌス伝』の聖人伝としての性格を指摘することによって、ノリクムの惨状を強調する人々に対する批判がなされた。最も重要な点は、『聖セウエリヌス伝』全体が「蛮族からの解放劇」という視点で構成されているという指摘である。きわめて印象的なイタリア移住の記事も、モーゼの出エジプトのモデルに従ったものにすぎず、実際に「全属州民が」「蛮族の支配から解放された」かどうかは疑問視されている。この点について、今日ほとんどの研究者は「全住民」の移住を否定し、農民層を中心に残った者たちがあったと考えている<sup>(13)</sup>。また移住の対象も、「下流側の」、即ちルギー族の支配下にあった地域に限定され、さらに、エウギッピウスが「破滅した」と言っている「上流側の諸都市」についても、考古学調査によって中世への都市の連続性が認められることがわかっている<sup>(14)</sup>。

さらに、このイタリア移住が「蛮族の支配からの解放」として歓迎されるべきものだったかという点にも疑問がある。ロッターなどは、この時代、ローマの支配機構が崩壊し、上層の住民が撤退してゆく中で、古代のコロヌスが崩れ、下層の農民たちが自由民に上昇する機会を与える結果になったと考えており、彼らが移住を歓迎したはずはないとする<sup>(16)</sup>。伝記の記述からみても、エウギッピウス自身、移住の際に人々は「出てゆくことを強いられた」という表現を用いている<sup>(17)</sup>。また他の箇所では、属州のローマ系住民がルギー族との交易を望み、活発な交易が行なわれていたと記しており<sup>(18)</sup>、ルギー族を苛酷な支配者としてのみ捉えていたのではないことがうかがわれる。以上の点を考えれば、この移住はむしろ、オドアケルがルギー族を攻めて勝利をおさめた後、ノリクムにおけるルギー族の基盤をなくし、ルギー族が再び力を貯えるのを防ぐためにオドアケルが命じた強制移住であったとするロッターの主張が説得力を持ち得るであろう<sup>(19)</sup>。

このように、エウギッピウスが出エジプトのモデルをノリクムに適用しているならば、「解放」を強調するためノリクムの惨状を前面に押し出そうとする意図が働いていたのではないかと、考えることも可能であろう。ロッターを中心とする近年の諸研究はこの点でほぼ意見の一致を見ており、かつての通説を形成していたノルも、最近ではこの傾向に歩調を合わせている。しかし他方、エウギッピウスの記述が地理的にはきわめて正確であることを、近年の考古学上の成果は証明している<sup>(20)</sup>。これらのことから、近年の『聖セウエリヌス伝』研究は、ノリクムの惨状ばかりを強調するのではなく、むしろ、伝記の中からうかがうことができる当時のノリクムの生活のありようを、より積極的に評価しようという方向に転じているのである。

このような観点から、次章では、伝記に記されたセウエリヌスの活動を検討し、当時のノリクム社会においてセ

ウエリヌスが果たした役割を考えてゆきたい。

## 二 ノリクムにおけるセウエリヌスの活動

伝記に記されたセウエリヌスの活動は、政治的なもの、救貧活動などの社会的なもの、そして修道院の組織にかかわるものの三つに大別できる。

まず目につくのは、ゲルマン人の襲撃に対する都市の防衛や捕虜の解放など、セウエリヌスの活動の政治性を示す記述が多いことである。セウエリヌスがノリクムで人々の信望を得たのは、まさにこの政治的指導力によってであつた。

都市の防衛にあたっては、敵の来襲を予言し、住民や家畜などを城壁のなかに避難させ、襲撃に備えるという方法が取られていた。<sup>(21)</sup>そこでは、敵の襲撃の予言は奇跡として取り扱われ、防衛も「祈りと断食と喜捨」によるものとされ、<sup>(22)</sup>敵は神の力によって打ち負かされるという聖人伝的な記述になっている。<sup>(23)</sup>しかし、セウエリヌス自身の高度な政治的指導力なくしては考えられないようなエピソードも見受けられる。たとえば、ファウイアニスの町がゲルマン人に襲われた時、セウエリヌスは国境の警備にあつていたローマの兵士たちを組織して敵を追わせ、掠奪者たちを捕えさせた。<sup>(24)</sup>襲撃の予知については、セウエリヌスと彼の弟子の修道士たちが都市城壁外の修道院に住んでおり、<sup>(25)</sup>そこには多くの客人が出入りしていたことから考えて、<sup>(26)</sup>彼らはゲルマン人の動きに関する情報を比較的容易に入手することができたと考えられる。

また彼は、住民の代表として、捕虜の解放を中心とするゲルマン人の王との交渉にも活躍している。彼がバタウ

イスという町に滞在していたときには、彼はアラマンニ族の王ギブルドゥスのもとに向いて捕虜解放の交渉を行ない、助祭のアマンティウスを派遣して七〇人の捕虜を連れ帰らせた。さらにこの後、司祭のルキルスもアラマンニ族のもとに派遣され、捕虜解放に努めたと記されている。<sup>(27)</sup> また、バタウイスの住民たちは、彼にルギー族の王から交易の許可を取り付けてくれるよう求めていたし、ルギー族支配下の諸都市では、貢納と引き替えに住民の安全を保証するようルギー王に約束させている。<sup>(29)</sup> さらに、「上流の諸都市」の住民たちの下流への組織的移住を成功させたことにも、セウエリヌスの政治的指導力がうかがわれよう。

彼はまた、ノリクムの住民の生活に対する配慮も怠っていない。セウエリヌスの社会的活動で特に注目されるのは、貧者に対する慈善活動である。<sup>(30)</sup> 彼は住民から十分の一税を徴収し、それに基づいて貧者への施しを行なっていた。<sup>(31)</sup> 冬の寒さが厳しいこの地では、特に衣服の供出と分配が重要であった。時には、比較的ゲルマン人の侵入による被害が少なく安定していた内陸ノリクムから衣服が送られてくることもあった。<sup>(32)</sup> さらに、イタリアからオリブ油を調達し、人々に分配したとも記されている。<sup>(33)</sup> これらの品物の分配は、教会や修道院において行なわれていた。また、品物の輸送には彼の修道院の修道士たちが当たっており、これらの慈善活動は修道院で組織的に行なわれていたものだと言及できよう。<sup>(34)</sup> ところで、旧約聖書に基づいて収入の一〇分の一を献じる慣習は四・五世紀にも存在したが、それは強制的なものではなかった。ノリクムの場合のように、相互扶助を目的として組織的に一〇分の一の徴収が行なわれていることは、この時期としては異例のものと思われ、注目に値する。

反対に、セウエリヌスに従わず、喜捨を拒んで私欲に走った者には、「罰の奇跡」が課された。ファウイアニスの町で飢饉の際に食糧を隠していた女性は、公衆の面前でセウエリヌスに激しく非難されているし、<sup>(35)</sup> 十分の一税を

払わなかつた者の畑は黒穂病でだめになってしまい、自分の畑だけ蝗に食われないようにしようと努めた者は、逆に畑をすっかり蝗に食い尽くされてしまう。<sup>(37)</sup>このようなエピソードはセウエリヌスの指導力の限界を示すものといえるかもしれない。しかしセウエリヌスは、これらの人々についても、罪を悔いた後には他の人々の施して生活できるように取りはからってやる。<sup>(38)</sup>こうした記述に、住民の間のトラブルの調停者としての彼の役割を見ることもできよう。

政治的、社会的活動と並んでこの伝記を特徴づけているのは、修道院設立者伝としての側面である。最後に、ノリクムの修道院について見てゆきたい。

セウエリヌスは今日「ノリクムの使徒」とも呼ばれているが、ノリクムへのキリスト教の普及はもっと早く、五世紀にはいるとかなりキリスト教が進んだと考えられている。<sup>(39)</sup>セウエリヌスの時代には、ラウリアクム、<sup>(40)</sup>ファウニアニス、<sup>(41)</sup>内陸ノリクムのティブルニアに<sup>(42)</sup>司教座も置かれていた。<sup>(43)</sup>教会史におけるセウエリヌスの最大の功績はむしろ、修道制の整備にある。<sup>(44)</sup>

ノリクムには、セウエリヌスの到来以前にも隠修士がいたと考えられている。セウエリヌス自身、放浪する隠修士としてノリクムにやって来た。しかし彼は、ノリクムに共任式の修道院を建設し、隠修士の群れを信仰の共同体にまで高めて修道制を発達させる。<sup>(45)</sup>彼がノリクムに建設した最初の、そして最大の修道院はファウニアニスにあり、<sup>(46)</sup>その他、<sup>(47)</sup>バタウィス、<sup>(48)</sup>ポイオトロローなどにも修道院が作られた。これらの修道院には聖堂があり、その祭壇には銀の聖杯が置かれ、<sup>(49)</sup>東方の修道院で好んで崇敬された洗礼者ヨハネや、<sup>(50)</sup>ミラノの殉教者ゲルウァシウス・プロタシウスの聖遺物が納められていた。聖務としては、朝の礼拝と夕方の詩篇朗唱が行なわれた。<sup>(51)</sup>そして、<sup>(52)</sup>修道士たちは、修

道院長であるセウエリヌスのもとに、司祭から門番に至るヒエラルヒーによって秩序付けられており、修道院長の権限が強かったという点で、エジプト・シリア修道制の影響が見られる。<sup>(53)</sup>

修道院は、セウエリヌスの政治的、社会的活動の基盤でもあった。修道士たちは、セウエリヌスの使者として重要な役割を果たしている。<sup>(54)</sup> 先にも見たように、彼らは十分の一税の徴収、運搬、分配に当たったり、捕虜解放の仕事を行なうために派遣された。また、ゲルマン人の来襲が予知された場合に、教会の聖職者たちに防備の指示を伝える使者となったのも、修道士たちであった。セウエリヌスと既存の聖職者との間には、禁欲的規律への反発などから対立が生じることもあったが、必ずしもそうした対立ばかりがあったわけではない。とりわけゲルマン人に対する都市の防衛や移住の指導などは、セウエリヌスの指示を受けた教会の聖職者が中心になって行なわれているのであり、セウエリヌスとの協力関係が指摘できる。<sup>(55)</sup>

しかしなかでも、ノリクムにおけるセウエリヌスの修道院の役割として最も注目すべき点は、彼の修道院が兄弟愛、隣人愛に基づいた慈善活動の中心として機能していたことであろう。彼の修道院の組織・運営は、後のヌルシアのベネディクトの修道院にも共通する点を多く持っているといわれる。<sup>(56)</sup> また、彼の弟子エウギッピウスが著した修道院会則は、兄弟愛と慈善の重視という点でベネディクトの会則の先駆をなすものと考えられている。<sup>(57)</sup> セウエリヌスは会則は作っておらず、また特定の会則を使うこともなかったが、セウエリヌス自身の命令や教父たちの先例をもって「規律」とし、破った者には厳しい罰が課された。<sup>(58)</sup> これらは、弟子エウギッピウスの修道院会則にも受け継がれていったと考えられ、この点でもセウエリヌスの修道制が待っていた意義がうかがわれる。セウエリヌスがベネディクト会修道院で特に崇敬された聖人であったことも、この点で注目されるであろう。<sup>(59)</sup> 『聖セウエリヌス

『伝』に記されたノリクムの修道院は、これらの点からみて、西方修道制の発達を考えるうえでも重要な位置にあつたといえるのではないだろうか。

### 三 セウエリヌス像をめぐる論争

以上に見てきたように、『聖セウエリヌス伝』に記されたセウエリヌスの活動は、政治的指導者と修道院設立者という、性格の異なる二つの要素を含んでいる。とりわけ高度に政治的な活動を彼がどうして行ない得たのが研究者の興味を引き、一九七〇年以降、F・ロッターを中心に、セウエリヌスの出自とノリクムにおける地位をめぐる論争が展開された。

『聖セウエリヌス伝』は、セウエリヌスの出自や前半生に関する記述を含んでおらず、もっぱらノリクムに來てからの活動のみを記している。また、伝記の成立事情を記したエウギッピウスの書簡にも、わかっているのは彼がラテン語を母国語とする人であったということと、ノリクムに來る以前に修道生活への強い憧れから東方におもむき、荒野での隱遁生活を送ったことがあるということだけだ、と記されている。<sup>(6)</sup> また、プリメニウスという名の司祭が出身地を尋ねたことがあったが、セウエリヌスは、「神の僕にとって自分の出身地や出自を言うことが何の役に立つというのか。」<sup>(6)</sup> といつて答えなかつたという。

このように謎に包まれているセウエリヌスの前半生について、いくつかの仮説がたてられた。その中で最も大きな反響を得たのがロッターの説である。彼は、セウエリヌスは屬州の高官、世俗の政治的支配者としてノリクムにやつてきた人物だと考えた。この主張の最大の根拠は、セウエリヌスに関するもうひとつの史料とされている『至

福なる修道士アントニウスの生涯について』（以下『アントニウス伝』とする）にある。この伝記は、エンノディウスによって書かれ、レランス修道院の修道士アントニウスの生涯を描いたものだが、この中で、パンノニアのワレティア地方に生まれたアントニウスが、八歳にして父親と死別した後、“*inlustrius vir Severinus*”のものと暮らしていたことが記されている。<sup>(62)</sup> ロッターは、彼に冠せられている *inlustrius vir* という形容辞が古代末期においては世俗の高官に与えられる称号であったことから、セウエリヌスも高官として知られた人物に相違ないと判断し、<sup>(63)</sup> 最終的には四六一年にコンスルであったフラウィウス・セウエリヌスとの同一性を主張した。<sup>(64)</sup> セウエリヌスがノリクムで指導的地位を占め、ゲルマン人に対する防衛を有効になし得たのは、彼がローマの軍隊の力を背景とした世俗の権力の座についていた経験があるからだ、とロッターは主張し、セウエリヌスを一介の修道士として扱っていた通説を鋭く批判したのである。

ノリクムでのセウエリヌスの政治的活動をロッターは前後二つの時期に区分し、その転換点をオドアケルによる西ローマ帝国の滅亡に設定した。<sup>(65)</sup> そして、彼の活動の推移を次のように跡付けている。ローマの支配が続いていた時期には、セウエリヌスは軍政・民政上の最高権力者として国境の防衛を指導していた。彼の権力を支えていたのは、ローマ帝国の軍隊であった。彼は軍隊を再編し、まずファウティアニスで勝利を収める。その後も彼の活動はおおむね成功をおさめ、都市はさほど大きな被害を受けなかった。しかし、ローマ帝国の解体にともない、辺境のローマ軍が解体したことによって、彼は政策の転換を迫られることになる。<sup>(66)</sup> これまで彼の権力の拠り所であったローマ軍に代わって、彼はルギー族の力に頼ることを決意し、ドナウ河上流の住民にルギー族治下の諸都市への移住を命じた。ルギー族の保護下に入ってから、帝国の官吏としての権威は失われたが、セウエリヌスはルギー族の王

にたびたび働きかけ、彼らの信頼を得て、住民の生活の保証と属州の存続に努めたというのである。<sup>67</sup>

ロッターのこの説に対して、セウエリヌス像をめぐる多くの議論がかわされた。しかし、やや飛躍の多いロッターの説を全面的に受け入れている研究者は少なく、特にコンスルのセウエリヌスとの同一性についてはほとんどが否定している。<sup>68</sup> また、*illustrissimus vir* という形容辞についても、これが必ずしも高官としての地位を示すとは限らない、という批判が R・ノルや H・ヴォルフによって出され、<sup>69</sup> ロッターとの間で行なわれている「一介の修道士」か「属州の高官」かという論争は今日に至るまで決着がついていない。今日の史料状況からすれば、この論争に決着を付けることは不可能のようである。結局のところ、E・ツェルナーが指摘したように、ノルのセウエリヌス像は『聖セウエリヌス伝』の記述にのみ基づく「最小のセウエリヌス」であり、ロッターのそれは「最大のセウエリヌス」の可能性を示したものだということであろう。<sup>70</sup>

しかし、セウエリヌスの出自の高さを想像させる記述は伝記の中にもいくつか見られ、彼がおそらく高い身分の出であろうということを認めている研究者は多い。古代末期においては、高貴な家柄の出身者が教会内で指導的役割を果たし、さらに社会のなかで指導者となってゆく例は希ではない。古代末期の西方世界では、帝国の解体にもない、教会組織が世俗の機構を引き継ぎ、中でもゲルマン人に対する抵抗運動の中心になってゆくという現象が帝国の各地において現われている。<sup>71</sup> ガリアやヒスパニアなどでは、帝国の官吏や軍司令官としての経歴を持っている者が教会の聖職者となり、ゲルマン人に対する抵抗運動を指導したり、住民の代表として交渉に赴いたりしている例がしばしば見られる。たとえば、軍司令官から司教に選出され、その後ペラギウス派鎮圧のためにブリタニアに渡った際、サクソン人・ピクト人に対する戦いの先頭に立ったといわれるオーセル司教ゲルマヌスなどは、こ

のような「戦う司教」の早い例であろうが、ノリクムにおけるセウエリヌスの活動も、こうした「戦う司教」の流れをくむものではないだろうか。セウエリヌスは修道士であったという点で例外的であったが、この時代の西方世界では、レランス修道院の修道士に典型的に見られるように、貴族階級の者が修道士になる例は多く、さらに修道士から司教になる者も多い。<sup>(72)</sup>セウエリヌス自身、ファウミアニスの住民によって司教になるよう要請されたことがあり、<sup>(73)</sup>また、彼がこれを拒んだのち、ファウミアニスの住民が司教に選んだのは、もと軍司令官のマメルティヌスであった。<sup>(74)</sup>セウエリヌスの出自が高い身分の出であろうと推測されていることを考え合わせれば、この時代ノリクムでは、政治的、軍事的な指導力を持った人間を司教に選び、自分たちの指導者にしようとする動きがあったといえるだろう。以上のことを考えれば、修道士と政治的指導者という二つの側面が同時に存在することも不自然ではない。『聖セウエリヌス伝』にはむしろ、禁欲的生活への志向を強く持ちながら、政治的・社会的指導者としての役割も引き受けるという、古代末期西方世界の聖職者にしてしばしば見られる両面性が見いだせるのではないだろうか。

他方、彼が突然東方からやってきた「部外者」であり、都市外の修道院を拠点としながら政治的、社会的活動を通じて共同体の統率者となっていたという点では、ノリクムの聖セウエリヌスは、近年P・ブラウンが主張しているような、四・五世紀のシリアにおける隠修士的な聖人の活動と軌を一にしているといえる。<sup>(75)</sup>ブラウンによれば、この時期のシリアでは社会構造に変化が生じ、支配層が解体してゆくにつれて社会的上昇の機会をつかんだ農民層が、既存の権威によらない、自分たちの選んだリーダーとして、荒野で極端な禁欲的修業を行なう「神の人」と呼ばれる聖人たちの指導権を認めるようになってゆくという。特に重要なのは、彼らの調停者としての機能であった。柱頭聖者シュメオンに代表されるこれらの聖人たちは、既存の教会組織の枠外におり、その権威は地方の農民たち

の間の名声に支えられていた。彼らは何の権力も持たない「部外者」であったが、「部外者」であるがゆえに、村落社会内の様々な問題や対立を公平な立場で調停するのに適任と考えられたのである。

セウエリヌスが活動したノリクムでも、ゲルマン人の侵入による旧秩序の崩壊があり、シリアの場合と同じような社会的背景が認められる。セウエリヌスの死後のイタリア移住に抵抗し、ノリクムに残ったであろうと考えられている農民層は、シリアの村落社会と同様にゲルマン侵入の時代に社会的上昇の機会を見たことであろう。そして、既に見たように、ノリクムの各地で人々が教会組織の外にあるセウエリヌスを住民間の争いの調停者に選んでいることは、シリアの聖人との類似点として指摘できる。西方世界では、禁欲的な隠修士が生きながらにして聖性を持つ「神の人」として近隣の住民の崇敬を集めるという現象はあまり見られないが、隠修士として東方を遍歴した後、ノリクムにやってきたセウエリヌスには、東方的な聖人像にふれる機会もあっただろう。彼はそれをノリクムの地で実践したといえる。しかし他方、ノリクムにおけるセウエリヌスの活動の中心舞台は都市にあった。また、彼の活動は既存の教会組織とも協力しながら進められており、都市の司教の権威を必ずしも無視してはいない。この点では、ノリクムも、都市の教会を核とし、司教の統率下に置かれた共同体としての西方のキリスト教の発展の枠組の中で捉えうる。このように、セウエリヌスの活動には、東方的な聖人像の影響と西方的な要素が混在し、興味深い聖人像を作り上げているのである。

#### 四 西方の聖人伝における「聖人」像の変化

『聖セウエリヌス伝』は、聖書のモデルのほか、五世紀に成立したスルピキウス・セウエルススの『聖マルティヌス』

ス伝』、パウリヌスの『聖アンブロシウス伝』、レランス修道院出身の司教の伝記である『聖ホノラトゥス伝』、『聖ヒラリウス伝』などを下敷きにして書かれたといわれる。とりわけ、同じく修道院設立者伝である『聖マルティヌス伝』は直接のモデルになったといわれるが、これらと『聖セウエリヌス伝』とはかなり趣を異にしている。特徴的なのは、『聖セウエリヌス伝』では神学上の問題がほとんど扱われていないことである。『聖マルティヌス伝』や『聖アンブロシウス伝』が異教徒や悪魔を敵として扱っているのに対し、『聖セウエリヌス伝』では敵とされてゐるのはほとんどゲルマン人である。また、『聖ホノラトゥス伝』や『聖ヒラリウス伝』においては、政治的活動についての記述は司教就任以後のもので、修道士時代には行なわれていない。

西方における修道院設立者伝の伝統からみるならば、放浪する隠修士としてノリクムにやってきたセウエリヌスが、隠者の生活を捨て、政治活動を通して積極的に社会と関わりを持つことは、本来俗世を離れて孤独を保つべき隠修士の生活の理想とは矛盾するようにも見える。著者エウギッピウスもこのことを懸念していたようである。彼はこの矛盾を次のような説明で解決しようとしている。「聖人は、隠棲所にしばしば引きこもっていた。それは、彼のもとへいつも殺到していた人々から逃れ、不断の祈りによって神により近くつき従うためであった。けれども、彼が独居を願えば願うほど、不幸な人々の前に現われることを拒んではならない、という啓示によって諫められることが頻繁になった。」<sup>66)</sup>「彼は神の思召しによって熱望していた隠棲をあきらめ、度重なる争乱に苦しんでいる人々の中に身を投ずるために、この地方へやってきたのだ。」<sup>67)</sup>

エウギッピウス自身の戸惑いが感じられるこのような記述は、修道士である主人公の政治的活躍を称揚することが、西方の聖人伝においてまだ定着していなかったことを示すものであろう。たしかに、彼の活動は修道士の枠を

はるかにこえている。しかし、ゲルマン人の侵入に伴う帝国の解体によって教会が政治的機能をも担うことを期待されるようになるこの時代には、政治的指導力が司教の手に任されることも少なくなかった。セウエリヌスは修道士であったが、その多彩な活動ぶりは、こうした新しい聖人像を代表する存在といつてよい。ゲルマン人の動向を見きわめ、ルギー族との協調をはかりながら属州民の生きる道を模索しつづけるセウエリヌスの姿は、ヴァンダル族に包囲されたヒッポの町で、住民の魂の司牧者として敵の掠奪にただ耐えて世を去ったアウグスティヌスとは別の時代のものである。その意味では、エウギッピウスがためらいながらもセウエリヌスの政治性を肯定したことは、政治的指導力が「聖人」の徳のひとつの要件として受け入れられるようになる転機を示すものといえるだろう。

現実的な救いをもたらす力が聖人の名声を左右したのは、驚くべきことではない。西方における聖人崇敬の発達は、聖人の奇跡力によって病氣治癒などのような現世的な救いをもたらされることへの期待感に支えられていた面が大きかった。民族移動期にあつては、ゲルマン人の侵入による眼前の危機の回避と生活の安定が最もよく求められた「救い」であつただろう。それはまさに、セウエリヌスの政治活動がもたらしたものである。このことから見れば、政治的指導力が「聖人」の徳として求められることは、むしろ自然ななりゆきだといえる。さらに、エウギッピウスが通常の修道院設立者伝の枠をこえてセウエリヌスの政治的活動に大きなウエイトを置くことができたのは、そこにも神の意志が働いていることを認め、それを奇跡という表現で正当化できたからであろう。即ちエウギッピウスは、セウエリヌスの政治的努力の結果を神の力の発現として捉えており、あるいは啓示という形で、あるいは聖書や既存の聖人伝のモチーフを用いることによって、神の力をセウエリヌスの行動と結びつけている。このような奇跡物語をいくつか見てみよう。

セウエリヌスがオリブ油を調達して住民たちに分け与える場面では、旧約聖書の預言者エリシャの話が引き合  
いに出されている。しかし、旧約の物語では入れるべき器がなくなったりと油が出なくなったのに対し、ここ  
では、命令に背いて大声を出した者がいたために、途中で油が出なくなっている。これは、調達した油が全員に行  
き渡らなかったものと解釈されている。次に、セウエリヌスが遠方の出来事を予知する場面は、『聖マルティヌス  
伝』に類例を見ることが出来る。『聖マルティヌス伝』には、修道院で働いていた者の一人を悪魔が殺したことを  
マルティヌスが予知する場面があるが、セウエリヌスの場合には、ゲルマン人の襲撃の予知はもとより、イタリ  
アへ俸給を取りにいった国境の兵士たちがゲルマン人に殺されたことや、ティブルニアから供出されるはずの一〇分  
の一税がゴート人に奪われること、内陸ノリクムからの供出品の衣服を運んでいた人々が道に迷うことなど、その  
予知の内容は現実的な問題が中心である。また、セウエリヌスがゲルマン人の王たちに対してとった毅然とした態  
度は、マルティヌスが篡奪帝マクシムスの晩餐に招かれたときの様子に似ている。セウエリヌスがオドアケルが王  
になることを予言した場面も、マルティヌスがマクシムスの将来を予言したことをふまえたものと考えられる。し  
かし、『聖マルティヌス伝』では、マルティヌスが他の司教たちのようにマクシムスに媚びた態度を取らなかった  
ことが称揚されているのであり、世俗権力との結びつきは否定されている。これに対し、セウエリヌスとゲルマン  
人の王たちとの接触は、捕虜の解放や住民の安全の保証などを目的としたものであり、セウエリヌスの世俗的な側  
面が強調されている。セウエリヌスとオドアケルとの関係は、後に追放刑に処せられていた者の召還に結びついて  
いるし、アラマンニ族の王ギブルドゥスとの交渉では多数の捕虜の解放に成功した。中でもルギー族の王たちとの  
関係の重要性はこれまで見てきたとおりである。

以上のように、『聖セウエリヌス伝』の各所で既存の聖人伝のモチーフが政治的な脈絡のなかで用いられている。このような手法を通して、聖人の政治的活動が伝記のモチーフとして組み込まれるに至ったことは、後の聖人伝における聖人像の形成にも多大な影響を与えたと考えられる。とりわけ六世紀のガリアにおいては、セナトール貴族層の司教位への進出が進む中で、教会の世俗化が顕著になる。ゲルマン人の王国のなかで政治的にも重要な位置を占めていたこれらの司教聖人のイメージには、セウエリヌスと共通するものがある。現時点では、『聖セウエリヌス伝』が古代末期の司教聖人像の形成過程にどこまで関わっているかについてははっきりしたことは言えないが、今後、他の聖人伝との比較を通して検討してゆきたい。

### おわりに

以上に見てきたように、ノリクムにおけるセウエリヌスの活動には、東方修道制と、東方的な「聖人」像の西方への移入という点で、そして、この後西方において顕著になる、貴族階級出身者の司教位就任や教会の世俗化との関係において、帝国の東と西をつなぐ二重の意義が認められるのではないだろうか。残念ながら、『聖セウエリヌス伝』の時代以降のノリクムの状況を知り得る史料はなく、セウエリヌスの活動がイタリア移住後のノリクムに与えた影響については詳細に知るすべはない。しかし少なくとも、彼の弟子エウギッピウス等を経てベネディクトに通じる修道制の発達過程では、彼の時代のノリクムが重要な位置にあることは疑い得ない。また、『聖セウエリヌス伝』そのものも、中世の聖人伝の模範として、この後の聖人像の形成に大きく関与しているといえよう。

## 注

- (1) Eugippius, *Vita sancti Severini* (以下 VS と略記)。この伝記の原本はいつが K. Rehberger, "Die Handschriften der Vita S. Severini", in *Severin zwischen Römerzeit und Völkerwanderung*, Linz, 1982, S. 21-39 参照。伝記のナキムナは一九世紀に H. Sauppe, P. Knöll, Th. Mommsen によって刊行され、戦後には E. Vetter のものが出たといふ。最近では Vetter のナキムナが最も一般的に用いられている。ナキムナに関する議論については Mommsen, "Eugippiana—Sauppe contra Knöll—", in *Gesammelte Schriften von Theodor Mommsen*, VII, S. 521-535, 1897/98; R. Noll (Hrsg.), *Das Leben des Heiligen Severin* (Schriften und Quellen der alten Welt, Bd. 11), Berlin, 1963, S. 27-35; L. Bieler et al. (eds.), *The Life of Saint Severin* (The Fathers of the Church, 55), Washington, D. C., 1965, p. 10 参照。本稿ではいつが以下ナキムナをよび訳本を参照した。
- Sauppe, H. (Hrsg.), *Vita sancti Severini*, MGH, a. a. I poster, Berlin, 1877.  
*Eugippii commemoratorium vitae sancti Severini* (Editiones Heidelbergenses, 10), Heidelberg, 1948.  
 St. Severin-Bruderschaft, *Vita sancti Severini, Das Leben des Heiligen Severin*, Wien, 1982.  
 Becker, P. (Hrsg.), *Eugippius, Vita sancti Severini*, Münster Westfalen, 1982 (5. Aufl.). Noll, R., a. a. O. Bieler, L., *op. cit.*
- (2) VS, c. 43-46.
- (3) 伝記の成立事情は、伝記に添えられた三通の書簡に記されている。一通は作者エウギッピウスからローマの助祭パスカシウスにあてられたもので、もう一通はパスカシウスからの返書である。
- (4) フン族のアッチラの西征(四四七—四五一)の行程にはノリクムも含まれていた。四五三年のアッチラの死の翌年には、ドナウ地方のゲルマン諸部族がフン族と戦い、フン族の支配からの独立を回復している。
- (5) セウエリヌスがノリクムに来た時には、ルギー族はローマと同盟を結び、コマゲニスに軍隊を駐屯させていた。その後、四七一年頃パンノニアにいた東ゴート族が南方へ移動したのを契機に勢力を拡大し、諸都市を支配下に収めた。ルギー族の王の居所は、ファウィアニスの対岸にあった。

- (9) Sulpicius Severus, *Vita S. Martini*. 本籍はダ' Sulpice Sévère, *Vie de Saint Martin* (Sources Chrétiennes, 133-135), Paris, 1968 を参照した。
- (10) Lotter, F., "Methodisches zur Gewinnung historischer Erkenntnisse aus hagiographischen Quellen", *Historische Zeitschrift*, 229 (1979), 308-11.
- (11) Dopsch, A., *Wirtschaftliche und soziale Grundlagen der europäischen Kulturentwicklung, aus der Zeit von Caesar bis auf Karl den Großen*, I. Teil, Wien, 1923, S. 134.
- (12) Kaphan, F., *Zwischen Antike und Mittelalter, Das Donau-Alpenland im Zeitalter St. Severinus*, München, 1947. ただし筆名未見。下村寅太郎『フロンティアの世界』岩波書店一九八三年一九一—二〇三頁 A. M.-Phannholz, "St. Severin", *Hochland*, 40, 1947/48, 380-382; Lotter, F., "Die historischen Daten zur Endphase römischer Präsenz in Ufernorikum" (241) Lotter, "Ufernorikum" (242) in Werner, J. und Ewig, E. (Hrsg.), *Von der Spätantike zum frühen Mittelalter*, Sigmaringen, 1979, S. 41f 242。
- (13) Noll, a. a. O., S. 17-27; Ders., *Frühes Christentum in Österreich*, Wien, 1954, S. 53-68.
- (14) Dopsch, a. a. O., S. 133ff.
- (15) Diesner, H.-J., "Severinus und Eugippius", *Wissenschaftliche Zeitschrift der Martin-Luther-Universität Halle-Wittenberg*, VII/6, 1958.
- (16) Lotter, F., *Severinus von Noricum, Legende und historische Wirklichkeit* (243) Lotter, *Severinus* (244) Stuttgart, 1976, S. 90-177.
- (17) Bieler, *op. cit.*, p. 27; Lotter, "Ufernorikum", 54.
- (18) Lotter, *Severinus*, S. 167-172; Ders. "Antonius von Léris und der Untergang Ufernorikums" (245) Lotter, "Antonius" (246) *Historische Zeitschrift*, 212, 1970, 313-315.
- (19) Lotter, *Severinus*, S. 270ff; Ders., "Antonius", 311ff; Ders., "Ufernorikum", 61ff.
- (20) VS, c. 4, 4, 5.
- (21) VS, c. 4, 10; 6, 4; 9, 1; 22, 2.

(19) このイタリヤ移住の記事には問題点が多い。この移住の直接の原因は、四八七年にルギー族とオドアケルの間で生じた戦争であるが、この戦争についてはビザンツの歴史家ヨハネス・アンティオケヌスも記しており、戦争原因の説明が彼とエウギッピウスの間で著しく異なっている。『聖セウエリヌス伝』四四章によれば、聖人の死後まもなく、ルギー王フェレテウスの弟フェルデルクスがファウィアニスの修道院を掠奪し、その罰として王息フレデリクスに殺されるという事件の後、ルギー族の内紛に乗じてオドアケルが遠征を行なったことになっている。一方、ヨハネスの説明によれば、この戦争は、東ローマ皇帝ゼノンの策動によりイタリヤ進攻を企てようとしたルギー族に対し、オドアケルが機先を制して宣戦したものとされている。セウエリヌスの死の直後に起きたフェルデルクスの殺害事件とオドアケルの遠征の間には五年の月日がたっていることから、内紛に乗じたとするエウギッピウスの説明は不明確といわざるをえない。ヨハネスの説明の方はより説得的である。ゼノン帝の外交政策として、後には東ゴート族がオドアケルの王国に対抗することになるが、この時にはルギー族がその任にあてられたと考えられるからである。この間の経過については、久野浩、「民族移動期における小部族の動向——ルギー族の場合——」『愛知県立女子大学紀要』一六、一九六五年を参照のこと。

- (20) Zimhobler, R. et al., *Severin*, Linz, 1982, S. 13f.
- (21) VS, c. 30.
- (22) VS, c. 1, 2; 1, 4.
- (23) VS, c. 2, 2; 25; 27; 30.
- (24) VS, c. 4.
- (25) VS, c. 4, 5-6.
- (26) VS, c. 25; 26; 34, Epistola Paschasi, 8.
- (27) VS, c. 19. 他 c. 9, 1; 10, 1 にも捕虜解放に関する記事がある。
- (28) VS, c. 22, 2.
- (29) VS, c. 31.
- (30) VS, c. 17, 1.

- (31) VS, c. 17, 2; 18, 2.
- (32) VS, c. 17, 4; 44, 1.
- (33) VS, c. 28.
- (34) Dummer, J., "Eugippius über die Rolle der Kirche in der Übergangsepoche", *Klio*, 63 (no. 2), (1981) は「  
 ノリタムへの修道院の救貧活動を」ローマの助祭教会による *annona* の分配と同じ役割を担うものと評価している。
- (35) VS, c. 3.
- (36) VS, c. 18.
- (37) VS, c. 12.
- (38) VS, c. 12, 6-7.
- (39) ノリタムにキリスト教が普及しはじめるのは、三世紀ごろ、遅くとも三世紀の末までと考えられているが、初期の様  
 相についてはよくわかっていない。コンスタンティヌス帝によるキリスト教公認ののち、すぐにノリタムの教会が再  
 編され、三四年のセルディカ公会議には、初めてノリタムの司教が出席している。その後、五世紀に入った頃から  
 教会の建物の構造が変化し、会衆の増加に対応できる形になってくるという発掘結果から、五世紀の初めには既に  
 なりキリスト教化が進み、定着しつつあったと考えられる。Bieler, *op. cit.*, p. 15f; Noll, *Frühes Christentum  
 in Österreich*; Gamber, K., "Die Severin-Vita als Quelle für das gottesdienstliche Leben in Noricum  
 während des 5. Jahrhunderts", *Römische Quartalschrift*, 65, 1970 参照。
- (40) VS, c. 30, 2.
- (41) VS, c. 9, 4.
- (42) VS, c. 21, 2.
- (43) これらの司教は、聖職者と住民による選挙で選ばれていた。Gamber, a. a. O., 146 参照。
- (44) この伝記の教会史上の意義については Gamber, a. a. O. の脚 Pflügg, A. J., "Christliches Leben im norischen  
 Österreich zur Zeit des hl. Severin", *Unsere Heimat*, 31 (1960), 101 以下、Diekerhof, H., "De Instituto  
 Sancti Severini. Zur Genese der Klostergemeinschaft des Hl. Severin", *Zeitschrift bayerischer Landesge-*



- (69) VS, c. 20. Lotter, "Antonius", 278.
- (70) Ibid., 311f. Ders., *Severinus*, S. 270ff. Ders., "Ufermoricum", 67ff.
- (89) Noll, R., "Literatur zur Vita Sancti Severini aus der Jahren 1975-1980", *Anzeiger der phil.-hist. Klasse der Österreichischen Akademie der Wissenschaften*, 118 (1981).
- (69) Wolf, H., "Kritische Bemerkungen zum säkularen Severin", *Ostbairische Grenzmarken*, 24 (1982), 24-51.
- (70) Zöllner, E., "Zusammenfassung: Noricum und Raetia I", in Werner u. Ewig, a. a. O., S. 257f.
- (71) H・I・ペルー, '上智大学中世思想研究所編訳' 『キリシト教史 2 教父時代』講談社, 一九八一年, 三四一頁。
- (72) Prinz, F., *Frühes Mönchtum im Frankenreich*, Darmstadt, 1965, 2. Aufl. 1988.
- (73) VS, c. 9, 4.
- (74) VS, c. 4, 2. Pffiff, a. a. O., 103.
- (75) Brown, P., "The Rise and Function of the Holy Man in Late Antiquity", *Journal of Roman Studies*, 61 (1971).
- (76) VS, c. 4, 7.
- (77) VS, c. 9, 4.
- (78) Possidius, *Vita sancti Aurelii Augustini*, PL 32, c. 28 ; 30.
- (79) Zinnhobler, a. a. O., S. 11.
- (80) Vita Martini, c. 21.
- (81) VS, c. 20.
- (82) VS, c. 17, 4.
- (83) VS, c. 29.
- (84) Vita Martini, c. 20.
- (85) VS, c. 7.
- (86) Vita Martini, c. 20, 8-9.

(87) VS, c. 32.  
(88) VS, c. 19.

(大学院後期課程学生)